



『桜と見返りの塔』

上田市隣の青木村にある大法寺の国宝三重塔です。はるか昔、東山道を旅する人々が小高い丘に姿を見せるこの塔のあまりの美しさに思わず振り返るほどであったことから見返りの塔と呼ばれています。小さい頃、この下でよく遊んだ懐かしい処でもあります。

水彩画への道程

63期 杵掛高夫さん

6年前の定年を迎えた折に、「広報さつぼろ」に駒岡保養センターの「やさしい水彩画」の生徒募集案内が掲載され、やさしいの文字に釣られて（中学校時代を含めて水彩画は大嫌いでした）申し込みました。然も、授業料は入浴代金込みで1700円（月2回）の格安さも魅力でした。

講師は原田ミドー先生、生徒は10数人程で、最初の画題はセザンヌ・ゴッホ・ピカソ等の絵画模写を数十枚描き上げてみると、原画（油絵）に近い模写となり水彩画への自信に繋がりました。教室の年間展覧会は、札幌芸術の森2回、駒岡保養センター4回、原田ミドー講座1回の7回で、此れまでの6年間に35枚程の作品を画き上げました。最近の画題は、道内旅行時の風景画と懐かしい信州の風景画へと移行しつつ、自分独自の水彩画へ取り組んでいます。尚、興味がある方は随時入会可能ですのでご連絡をお待ちしています。

雪の中に響く校歌～観楓会の報告

66期 杉山孝治さん

平成28年度の観楓会は11月11日（金）午後6時30分から、昨年に引き続き札幌市北区のイタリアンレストラン「ダイニング・イル・ネージュ」で12名の参加で開催されました。大谷さん（65期）が大学生の頃常連で通っていた店とのこと、貸し切りでゆっくりと楽しむことができました。今回は白石さん（90期）と金井さん（94期）が初参加です。白石さんは札幌学院大学で言語学の研究、金井さんは製薬会社に勤務し、最近札幌市内にマンションを購入したとのこと、北海道在住の同窓生が増えることは頼もしい感があります。

参加者から近況報告がありましたが、今年の話はなんとといっても「真田丸」です。北海道での上田市の知名度は一気に上昇、定着した感があります。ブームで終わらず、故郷がこれを機にますます発展してもらいたいものです。

8月20日から21日に足寄町で行われた「道東地区会員との交流会」では宿泊先の芽登温泉での宴会途中で町の避難指示があり、思ってもみなかった避難体験をしました。21日には吉川さん（81期）が経営する「ありがとう牧場・しあわせチーズ工房」でチーズを買って帰る予定でしたが不可能になってしまいました。そのため、少々の営業協力の意味もあり、牧場からチーズを取り寄せて観楓会の場で販売しました。ハードタイプチーズの「幸（さち）」とウオッシュタイプチーズの「茂喜登牛（もきとうし）」の二種類です。完売です、ご協力有難うございました。その後購入した方からは「濃厚な深い甘みで美味しかった」との言葉をいただきました。

最後の校歌斉唱するころにはボタン雪が降り始め、雪見を兼ねた観楓会は無事終宴です。

<観楓会に出席された方（敬称略）>

櫻井武（43期）、中曾根公（51期）、杓掛高夫（63期）、清澤通俊（64期）、大谷文昭（65期）、中村今朝良（65期）、杉山孝治（66期）、松山英俊（66期）、矢島崇（67期）、北澤多喜雄（73期）、白石英才（90期）、金井貴生（94期）

<欠席者からの一言>

- 武井國憲さん（44-5期） 長い間、大変お世話になり有難うございました。同窓生の皆さんの御健康と会の発展を祈念いたします。
- 斎藤昭夫さん（46期） この歳になって地域ボランティアに深入りしすぎてしまい、当日も時間がとれません。すみません。
- 山田秀昭さん（50期） 体調不良の為、欠席させていただきます。
- 中西悦子さん（56期） いつも係の方御苦勞様！私は近くを静かに歩く程度で札幌までは無理でしょうから皆様に宜しくお伝えください。
- 田中健二さん（58期） 他用あり失礼します。皆様によろしく。
- 矢嶋俊彦さん（59期） 元気でやっています。京都旅行のため出席できません。皆様によろしくお伝え下さい。
- 増田武夫さん（61期） 大変申し訳ありませんが、都合で出席できません。御盛会をお祈り致します。

- 山岸宏一さん（61 期） 同窓会の皆様、御苦勞様です。幹事の皆様も色々企画してくれ有難うございます。11/10～14 は四国・松山に居ります。
- 若林裕二さん（71 期） 5 月の連休、上山田に帰省、上田高校に立ち寄ってみました。弓道場が新設され、部員の多いのが印象的でした。（元弓道班）
- 石黒浩一郎さん（76 期） 出席できなくて申し訳ありません。12 月 15 日に開業予定の AYA NISEKO の工事監理でニセコに常駐しております。皆様によろしくお伝え願います。
- 濱豊さん（82 期） 誠に残念ながら公私共に多忙の為出席できません。次の機会を楽しみにしております。
- 松林洋さん（90 期） 欠席失礼致します。毎日、信毎サイトを閲覧しています。道新より論評が的確だと思います。
- 渡辺由美さん（90 期） 仕事をしながら 3 人の子（小 6、年長、2 歳児）の子育て奮闘中です。なかなか自分の時間が持てません…。
- 佐藤匠さん（113 期） 10 月 10 日に行われた北大駅伝において、二区走者としてチームの一般の部優勝に貢献しました。



左より 北澤、杉山、金井、矢島、中村、白石、沓掛、松山、清澤、櫻井、中曾根、大谷の各氏



母校での社会講座に参加して

73期北澤多喜雄さん（酪農学園大学）

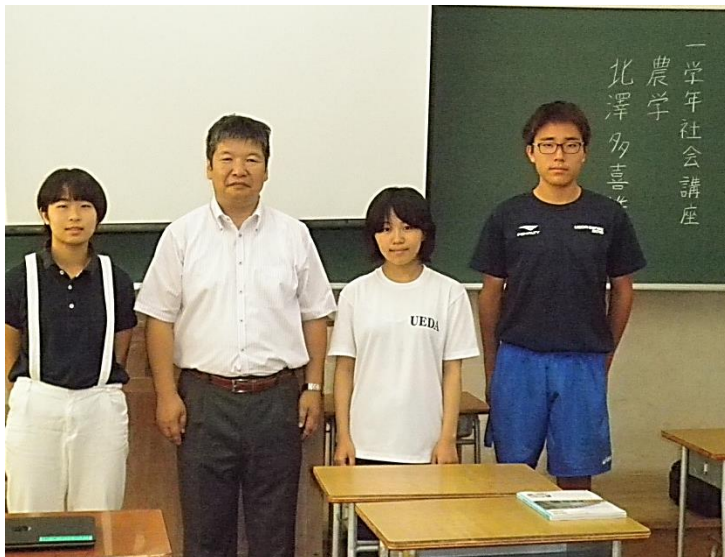


母校、上田高校で行われている社会教育授業の一環、「社会講座」に北海道同窓会から派遣され、一年生に講義をしてきましたので概略を報告します。この講座はこれから進路について考えていく一年生に様々な分野で仕事をしている同窓生が仕事内容等を紹介して学生が進路を考える上の一助とするものです。学生に多くの選択肢を与える目的で15名程度と同窓生が当日は講義に来ていました。日時は、2016年9月13日の火曜日でした。実家が上田市上塩尻にある私は数日前に帰省し、両親や友人の墓参り、兄弟との再会を楽しみました。13日は、まず午前中に西上田駅よりしなの鉄道に乗り上田まで移動し、午前中は上田城址を散策しました。ご存知のように昨年は「真田丸」人気で、平日でしかも少し小雨が降って

おりましたが上田城址は大変な賑わいでした。大型の観光バスも何台も来ており経済効果も相当なものだとは思いますが、これが大河ドラマが終了した現在はどうなるのかなと少し不安を覚えています。また、旧上田市民会館は大河ドラマ館として使われていました。城址を散策したあとは、見間違えるように変わった母校上田第二中学校の校舎を眺めながら上田高校まで移動しました。校門は昔のままで、写真を撮ったのちに校内に入っていました（数十年ぶりに校門をくぐったこととなります）。今回私が一年生に話をした内容は、「獣医師、動物看護師になるには？どのようなカリキュラムを勉強するのか？大学で行っている研究とはどんなものか」などの内容でした。聴講学生は12名位でしたが、加えて塩尻小学校の同級生で中学校、高校と同じ学校を歩み現在、上田高校で地理歴史の教員をしている沓掛哲生さんも話を聞きに来てくれました。獣医師、動物看護師になるにはどうするかでは、獣医師や動物看護師養成課程がある大学が日本ではそれほど多くないこと、獣医師



は国家資格であるが、動物看護師資格は違うこと、大学で勉強する内容としては、例えば解剖学、生理学などの基礎生物系の科目、病気やその原因である細菌学やウイルス学などの感染症関連科目、食中毒や動物・人間の衛生管理などの公衆衛生関連科目、犬猫の病気、原因、治療法などを勉強する伴侶動物医療分野科目、牛や豚、鳥などの病気を扱う生産動物医療分野科目などがあることを話しました。また、獣医師と聞くと犬猫の動物病院、牛豚のお医者さんの印象が強いと思いますが、それだけではなく、地方・国家公務員として食品の安全性の管理、検疫や畜産行政に関わる場合、他に野生動物の保護、薬の開発、基礎研究に関わるなど実に幅広い分野で仕事ができる職種であることを紹介しました。最後に私の専門分野である薬理学について、学生さんになじみがある鎮痛薬（痛み止め）に焦点を合わせ身体



で痛みが起きる仕組み、その仕組みの中で鎮痛薬がどのようなメカニズムで効くのかを紹介しました。痛みの増強物質と痛みの伝達を薬が抑えるという話ですが、実験の data など見せましたので興味深く聞いてくれたと思います。最後は少し私が興味をもって研究している消化管運動について、実際の消化管運動の動画を見せ紹介しました。消化管がきちんと機能をもって動いている時は、必ず消化管の平滑筋は収縮（興奮、オン）している部分と弛緩（抑制、オフ）している部分があります。即ち、興奮（一生懸命働く）もするし、抑制（休息をとる）もするので身体は機能を維持するのであって、そのバランスが大切なことを説明しました。学生の皆さんには日々の学生生活でも消化管の運動のことを忘れないで欲しい、勉強のオンとオフ、余暇のオンとオフをしっかりと学校生活を送って欲しいとのメッセージで講座を終了にしました。数名でも獣医学に興味を持ちその世界に進んでくれたらと思います。今回は本当に貴重な経験をさせていただきました。推薦して頂いた清澤会長に深謝します。

紙面の都合上いくつかの上田の写真を示します。



会員による 誌上講演

道内では多彩な分野で上田高校の同窓生が活躍されています。このため、総会などの機会にそれらの方々に専門分野（仕事）の内容やそれに携わることになった経緯、その中でのエピソード、あるいは故郷・母校に繋がることなどについて話してもらって会員相互の研鑽を深めたいと思っています。しかし、時間的・場所的な制約もあり、年1回の総会で全員の方を巡るのは困難であることから、会報を使って毎号数人に誌上に登場してもらい「会報誌上講演」をしていただくことにしました。

今号では、76期の石黒さんにいかに建築設計への道を歩んできたかの話（第一部）を、また、90期の白石さんには専門の言語学にまつわる話などをしていただきます。

建築の修業時代：建設から建築へ（第一部）

76期 石黒浩一郎 さん

(株) ISA アーキテクト 代表取締役



今年は建築設計の仕事を初めて 35 年の節目となりました。このたび上田高校同窓会報へ寄稿できる大変良い機会をいただいたので今までの人生を振り返りつつ備忘録として書き始めました。ところがかかなりの長文になってしまったため二回に分けて掲載をお許ししたいと思います。公的な同窓会報の紙幅を大きく使ってしまい大変恐縮です。退屈かもしれませんがどうぞよろしくお付き合いください。

私は上田高校 76 期卒業で名古屋工業大学建築学科に進学しました。名工大建築学科は日本で二番目に設立された建築教育の名門であり、当時は全国から建築家を目指す俊英が集まっていました。建築を学ぶ雰囲気は充実する中で私は高校以来続けていた陸上競技（棒高跳び）に熱中している変わり者でした。東海インカレに出場したことが大学での一番よい思い出となっているほどです。勉学にはさほど熱心でなかった私は大学院に進学せず、研究室の内藤昌先生（諏訪青陵高校 OB）のご尽力により大成建設設計部に就職しました。当時はゼネコンの設計部は現在ほどのステータスがなく、大手建築設計事務所に準ずる就職先でした。

大成建設の新入社員の毎日は修業ともいえる厳しさでした。入社研修は自衛隊の朝霞基地で 2 週間、その後は設計部採用といえども現場監督員として一年間の現場研修が課せられました。現場研修先の上司はその後大成建設の社長・会長・建築業協会会長を歴任された平島治氏でし

た。平島氏には徹底的に「建設とは何か」ということを教育されました。「後工程はお客さま」という言葉は当時の大成のスローガンですが、建設技術を通じてクライアントに奉仕する重要性を徹底的に教え込まれました。同時に当時の最高レベルの職人たちから実務的な知識を直接教えてもらい、これは今に至るまで私の技術的な財産となっています。ほぼ毎日現場に寝泊まりし、土工の職長からさえも同情された日々でしたが、今思うと素晴らしく充実していたと思います。

入社二年目からは設計者としての仕事を始めました。幸か不幸か個人のクライアントに依頼された小規模な建物の設計を担当したため、若輩ながら自主的に設計を進める機会に恵まれました。どのクライアントにもたびたび叱責されながら暖かい薫陶をいただきました。結果として設計を担当してからわずか三年目で10件程度のプロジェクトの設計監理を抱えるようになりました。相変わらず独身寮にはほとんど帰らず会社で寝とまりする毎日でした。この時期はたぶん一年間で5000時間を超える仕事をしていたと思います。それは自分の考案した設計が現実に建物になるという設計業務が面白くてたまらない時期だったからです。以下の写真は25歳から28歳までに手掛けていたプロジェクトです。こうした生活の中で【石黒はなかなか頑張っている】という社内的な評価をもらうようになりました。



28歳の時にニューヨークの大手設計事務所 KPF 社に研修に行かないかという誘いがあり二つ返事で行くことにしました。足掛け4年間にわたるニューヨーク生活の始まりです。KPFは今でも世界で最もパワフルな大手設計事務所です。日本では六本木ヒルズ、名古屋セントラルタワーズなどの大規模計画のデザインを行っています。デザインを率いるのはウィリアム・ペダーセンで、私が「どんな建築家になりたいか？」と問われたら躊躇なく「ペダーセンのような」と答えるくらい理想的な建築家でした。ペダーセンと彼の代表作を紹介します。



研修の約二年間、ペダーセンの近くでモデラーとしての修業を行いました。モデラーとはペダーセンのスケッチ（大いに曖昧なものです）をもとに建築形態を類推して模型をつくる職能のことです。KPFでは若くて飛び切り才能に恵まれた5人程度にこの仕事が任されておりKPFの独創的な形態をつくるキーポイントになっていました。私がペダーセンの専属モデラーになった理由は分かりませんが、KPFの社風である日本文化に対する尊敬が根底にあったのだと思います。こうして大成建設で学んだ「建設」がKPFの追求する「建築」に変容していく時を迎えました。ペダーセンとの対話の中で、日本で私が経験したものとは全く違うデザインが存在することに気が付いたのです。この時期私が作成した模型をご紹介します。日本でデザインしていた時から一気に飛躍したことがお分かりいただけるかと思えます。



当初予定の二年間の研修が終わりに近づいたある日、ペダーセンからコロンビア大学のAAD (Advanced Architectural Design) に進学しないかという思いもかけない提案をもらいました。大成建設と決めた研修期限がせまっているし、何よりコロンビアのAADは当時の世界最高の建築大学院として名声を博していました。わずか20名の学生に対して綺羅星のような建築家たちが教鞭をとるといった夢のような教育環境で、たしか入学時の競争率は400倍以上だったと思います。「自分が入れるはずがない。」と答えるとペダーセンは「大成建設の社長に研修延期をお願いする手紙を書くし、チュミ（当時のコロンビア大学建築学部長）に推薦状を書くので必ず入学できる。」と私を説得するのです。結局、KPFの三巨頭（コーン・ペダーセン・フォックス）の強烈な推薦状とKPFの若手スタッフ協力による作品集を大学に提出しました。その日のうちにチュミから「入学を歓迎する。」と電話をもらいました。実質的には「裏口入学」だったと思います。こんなことで2年にわたるコロンビア大学の生活が始まりました。日本では実務的な面（フィジクス）＝建設のみに携わってきた私には、建築の根本に哲学（メタフィジクス）を据えるコロンビア大学の建築教育は本当に衝撃的でした。建築史の碩学ケネス・フラ

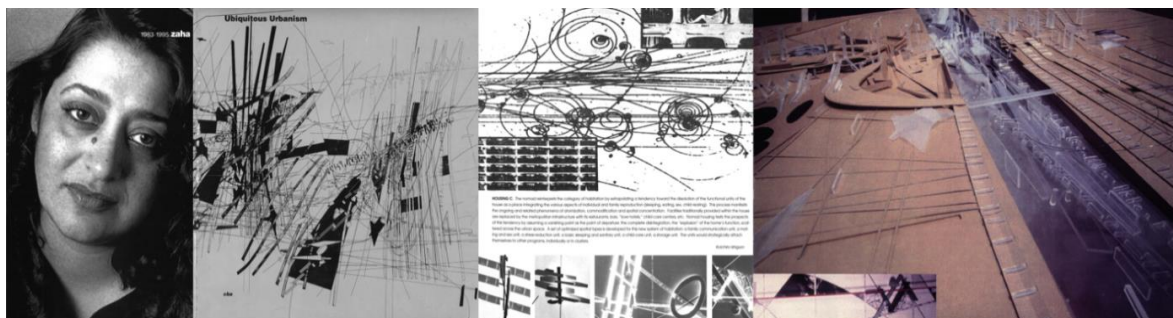
ンプトン、世界的な名声を得ていた建築家スティーブン・ホールやレム・クールハースなどと身近に交わることは、KPFの中で育んだ「建築」に大きな広がりをもたらす機会となりました。10年以上遠回りしましたが、ようやく建築について真剣に学ぼうと決心したのです。建築デザインの授業と並行して広く建築理論に関する文献を読み、翻訳活動も行いました。



映画「イチゴ白書」の舞台となったコロンビア大学法学部図書館。晴れた日は友人たちと階段でよくランチをしていました。

コロンビア大学時代に出版に関係した建築の本
 左 コロンビア大学建築学部作品集
 中 チャールズ・ジェンクス著『複雑系の建築言語』（翻訳）
 右 ケネス・フランプトン著『テクトニック・カルチャー』

とくにザハ・ハディットが主催するデザインスタジオでは「建築に向かう覚悟」を徹底的に問われ鍛えられました。ザハはご存知の通り 2020 年東京オリンピックの実現しなかったスタジオの設計者です。惜しくも急逝しましたが、建築にかける執念とエネルギーはすさまじく、ザハとの6か月のスタジオはいつも濃密な雰囲気にもまれていました。哲学的用語が必要なプレゼンにおいて、言葉のハンディをもつ私はザハにいつもその消極性を叱責されました。ある日言葉がダメならと一晩でデザインを考え完璧な模型を作成したことがありました。翌日ザハは若干驚きつつも“Koichi, where did you buy this?”と私をからかっていました。ザハは僕にとってゴッドマザーでした。スタジオ最後の発表会のとき、建築サミットができるといわれた豪華ゲスト・クリティークを招待した中で、学生代表で発表したのは相変わらずプレゼンが不自由な私でした。発表前の72時間休みなしに模型や図面を作り、疲弊する同僚を鼓舞し、最後にはスタジオ全体を指揮したことに対して暖かく見守ってくれていた眼差しを感じました。日本に帰国した後もザハから何度かメールが来てロンドンの事務所で働かないかという



誘いをいただきました。大成建設への恩義もあり果たせませんでした。今でもあの時ロンドンに行ってザハと働いていたらと夢想することもあります。ザハとそのスタジオでの作品「偏在する都市」を紹介します。学生によるグループ作品ですが多めに評判になり作品集として出版・販売されました。

長い長い夏休みのような研修生活を終えて 1992 年 11 月に帰国しました。31 歳の時です。それから本格的な建築の創作活動が始まりました。 (第二部に続く)

『真田丸』と少数民族言語研究

90 期 白石英才 さん
(札幌学院大学経済学部准教授)



歴史ドラマを観ながらその登場人物に自らの生き様を重ね合わせる愉しみ。昨年の NHK 大河ドラマ『真田丸』では真田家の人々に感情移入しながらそれを経験した方も多かっただろう。人気シミュレーションゲーム『信長の野望』の勢力図導入、三谷脚本による軽快な場面進行などにより人気を博し、郷里上田も大いに注目されたが、真田モノのドラマとしては 1985-86 年放映の『真田太平記』(原作：池波正太郎、新潮社)も忘れられない。真田家(配役：真田昌幸ー丹波哲郎、真田信幸ー渡瀬恒彦、真田幸村ー草刈正雄)とそれを支える草の者(忍者)集団が北条、上杉、徳川といった大勢力に伍して何とか生き延びようとする凄味が伝わるような作品だった。

つい三谷『真田丸』と池波『真田太平記』を比べてみてしまいがちだが、前者には新たな仕掛け・視点がいくつも導入されており、さらにそれが説得力をもって伝わってくるのは最新の歴史研究上の成果が反映されていることであろう。真田幸村を本名の「信繁」で通したことも講談文化との決別の姿勢が伺える。また真田信繁はとかく大坂の陣に代表される戦場での華々しい活躍が目立ちがちだが、今回の作品では石田三成を補佐する文官としての有能さにも焦点があたっていたことが興味深い。加えて、室賀氏、高梨氏、出浦氏と上田小島の地侍が脇を固めたことは作品のリアリティを演出する上で大いに役立っていた。個の力は弱くとも、集まって知恵を絞れば生き延びる道が開ける。信州のそういう気風の中で育ったことは、私が少数民族言語を研究する道に進んだこととつながるように思えてならない。

20 年来調査・研究を続けているニヴフ語（旧称ギリヤーク語）はサハリン・アムール地方に約 5,000 人居住する少数民族ニヴフ人の言語である。現在、その話者数は推定で 50 名程度にまで減少し、日常の言語はロシア語にとって代られて久しい。地理的には南のアイヌ語、西のツングース諸語に接するニヴフ語は、興味深いことに周辺のど

の言語とも系統関係が不明な「孤立言語」として知られている。それだけに未解明の謎も多く研究テーマは山積しているのだが、実は消滅の危機にあるのは話者のみならず研究者も同じ事情である。ニヴフ語研究を専門とする研究者は大学院生を含めても世界で五指に満たず、言語学界においても稀少種といえる。

そのように研究仲間が少ないことは様々なハンディにつながり、例えば就職においても英語や日本語といった大言語の研究者に比べて著しく不利である。そのため若い言語学徒にニヴフ語研究の道を安易に勧めることは決してできない。その一方で話者は高齢化し、ニヴフ語の現地調査が可能な時間はそう残されていない。ニヴフ語のみならず、アイヌ語や琉球語といった少数言語研究に従事する言語学者は少なからずそのような課題を抱えつつ研究をしている。



現地調査はサハリン北部のオハやネクラソフカで行われている



ニヴフの伝統舞踊の披露



民族衣装を着たニヴフ女性

明るい

見通しがいいわけではない。言葉は話さずとも、民族言語の継承を望む若年層は確実に増えている。ニヴフ語においてもサハリン州政府やサハリンで石油・天然ガスを採掘する国際企業の援助を得ながら民族言語の復興活動に従事する 30 代、40 代のニヴ



サケをおろして干す



調査風景

も少数だが、かつての上田小島の地侍集団のように少数者連合を組めば、ニヴフ語のような少数言語も生き延びる道が開けてくるのではないかと考えた。『真田丸』を観ながらそんなことを考えた。

フは存在する。彼らがニヴフ語を話すようになるまでの道のりは決して平坦ではないが、幸いなことにこれまでの研究の蓄積により過去の言語資料は豊富に存在する。そうした言語資料と現在の言語復興運動の橋渡し役をすることは、我々言語学者に課せられた重要な社会貢献活動である（研究成果の現地還元）。

ニヴフ語話者、ニヴフの若者、言語学者はいずれ

みなさんこんにちは！！

①あだ名・ニックネーム

43期 櫻井 武 さん（札幌市在住）

私たちの時、上田中学校では、先生にあだ名をつけることが当たり前のことだった。

今でも記憶している当時の先生方のあだ名をあげると、タネさん、隠居さん、五銭、オトガイ、ガンちゃん、温ちゃん、赤鬼、ダイコン、ごぼう、ネギ坊主等々で、この中で本当の名前を記憶している先生は何人もおりません。当時、それぞれの先生の特徴をとらえたもので、誠

によくできていると思っていました。

あだ名ばかり使っているのでも、教員室へ行って、先生をあだ名で呼んで叱られた者もいた。今では本当の名前は忘れて、あだ名だけを記憶している先生の方が多い。あだ名は、早い時は、先生が着任の挨拶をすると直ぐ付けられたものだ。

そんな中に「焼き入れ」という先生がいた。本当の名前は忘れて思い出せないが、図画の先生だ。中学校のすぐ近くに刀鍛冶がおり、その声に似ていることから付けられたものだ。私は5年C組で、私の隣の席は穂刈君だった。二人とも数学が得意で、よく発言していた。

ある図画の時間、容器画の講義が行われていた。投影、透視図を三角定規、コンパスを使っ

て黒板に図面を描くのだが、なかなか上手に描けない。コンパスの両脚を締める蝶ねじが不具合のようだった。先生は「コンパスの具合が悪くて」と云ったので、私はすかさず「焼きを入れたら」と云った。クラス中がどっと沸いた。

私にとってはこれが最後の授業で、予科練に入隊の準備があるため下校した。授業が終わって、穂刈君が教員室に呼びつけられ、授業中の「コンパスに焼きを入れたら」の言葉をとがめられた。穂刈君は「あれは私でなく櫻井だ」と云うと、先生は「櫻井を呼べ」と云うので、「櫻井は予科練に行くのもう帰った」と云うと、先生は極めてご不満のようであったがやり場が無かったらしい。後日、改めて退校の挨拶に学校に出かけたとき、焼き入れ先生につかまり、人生についてきつく指導を受けた。

戦後 50 年も経って、当時担任であった下島先生と一緒に訪問した時に、穂刈君は私のために焼き入れ先生にとがめられたことを悔やんでいた。

話は変わるが、私は戦時中、香港の震洋特攻隊渡辺部隊で「長官」というニックネームで呼ばれていた。これは同じ部隊にいた、軽井沢出身で上田中学校の 1 学年下の荻原正次君が私に付けたニックネームだ。彼は軽井沢から、私は小諸から、同じ列車で通学していた上田中学の上級生、下級生という関係から、彼は私を「櫻井」と呼び捨てにできずに「櫻井長官」と呼んでいた。それが部隊中に広まって、皆が私を「長官」と呼んでいたのだ。

あるとき、私が基地の栈橋でダイハツ（連絡用艇）から降りると、誰かが「長官」が来たと叫んだ。すると基地隊長の仮屋園少尉が走ってきて、私の顔を見て、なんだお前かと云ってがっかりしていた。香港海軍の根拠地司令長官大熊中将が来たと思ったとのことであった。

戦後も戦友会などで集まると、皆に長官と呼ばれていた。香港の震洋特攻隊で一緒だった、三重県の安西昭君が社用で札幌に来たとき、一杯飲みながらの歓談中に「長官」を連発するので、女将になぜ長官なのと聞かれたことがあった。

なんとも素敵なそして愉快的なニックネームであった。

②自己紹介と雑感

61期 山岸宏一 さん（旭川市在住）



私は上田市下塩尻の生まれで、高校卒業後（第 61 期卒）昭和 38 年春北海道にやってきました。北大に入学後 10 年在籍し、ようやく社会に出られたというありさまでした。専門は一口でいえば木材の利用研究といったところです。昭和 48 年、旭川にある北海道立林産試験場に就職し、約 20 年間勤めたのち、平成 5 年 4 月旭川市内にあった東海大学芸術工学部に招かれ、19 年間教鞭をとり平成 25 年に退職し、現在に至っております。

少し肩苦しい話となりますが、日本は国土の約 65%が森林で、有益な樹木が数多く生育している世界有数の森林大国です。このため、世界から見れば「日本の文化」といえば「木と水の文化」ともいわれており、世界遺産として評価されているものは屋久島の縄文杉や白神山地のブナの原生林等、さらに法隆寺五重の塔、姫路城をはじめとした多くの神社仏閣など木造建築物です。いかに日本人の生活が森と寄り添いその恵みである「木」を知恵と工夫をもって駆使し生活してきたか分かります。森林の役割や木材の有益性についてはここでは触れませんが、豊かな森林資源を用いた優れた研究、技術開発は世界の最先端をいっており、2020 年の東京オリンピックのメインスタジアムはその技術の粋が巨大なドームとなって世界に披露されるでしょう。

これまで地球上のあらゆる生物にとって森林がいかに大切なものであったかかは改めて述べるまでもありませんが、地球という小さな星に生きているすべての生物は、互いに多様性を保ちながら生きています。しかし、その生態系の頂点に立っている人類だけが異常に数を増やし、いまでは 73 億人以上に拡張しているというのが現状です。一方、地球の生物の中で物質の生産活動を行っているのは植物がほとんどで、その生産能力はすでに地球の他の生物を養う力を超えているという説もあります。

その意味で、これからの生き方としては、地球の自然を考えつつ循環型社会の構築を目指すことが必要と思います。また、地下資源が有限であることは誰もが知っていることですが、次世代の資源は森林資源が頼りとなりますので、いまからその利用加工技術を確立しておくことが子々孫々の繁栄ために重要であることを強調しておきたいと思います。

話は変わりますが

原子力科学者会報が 1947 年「地球終末時計」dooms day clock を設定し、人類の絶滅を 0 時とし残り時間を 7 分前に設定しました。それ以来 核実験、核保有国の増加、戦争などによって時間が少しずつ短縮されてきました。ただ国際情勢の緩和やベルリンの壁の崩壊などのときは逆に時間が逆戻りされることもありました。日本の原発事故も時間短縮に影響したようです。

その時計が今年1月に2分30秒まで進められたそうです。これは「アメリカファースト！」を唱えたトランプがアメリカ大統領選に勝利したためです。トランプがどんな政策を打ち出すのか？世界は戦々恐々として見守っています。週末時計を管理している委員会が針を進めたということは余程「危険だ」と評価したのではないのでしょうか。就任以来大統領令を連発し、マスメディアの意見や世論調査の結果なぞ「インチキだ！」として無視している姿をみると委員会の判断は時機を得ております。我々人間も生物と同じように国家、民族、宗教の違いを乗り越え多様性社会を求めていくべきです。就任からまだ数か月の経過ですが打ち出してくる政策はアメリカ内部でも批判が強く、トラブルも多く発生しています。批判や忠告を受け付けなくなってしまいそうな「裸の王様？」状況だけは回避して欲しいと思うのですが…

私は5~6年前から加齢黄斑変性症という不治の病に罹ってしまいました。医者が言うことには「この病気は放置しておくとう失明します」との厄介な病だそうで、私の友人も目が見えにくくも放置していたところ、片目が失明してしまいました。そのため毎月検査をしていますが、1~2年ごとに決まって再発し、このような治療行為を一生継続しなければなりません。

しかし、有難いことにこの病気も網膜の細胞を培養し、それを移植手術することによって治せるといった情報も報道され、移植手術も行われ始めました。この先端技術が一般の患者に適應されるようになるには未だ少し時間は掛りそうですがバイオテクノロジーに大いに期待しています。

しかし、現代の自然科学の進歩は目覚ましく、我々が付いていけないようなスピードで進んでいます。特に、情報のスピードはすぎましい限りで、情報機器は小型化、演算能力はスピードアップしました。医学の世界でもバイオテクノロジーで難病の治療が可能となり、試験管の中で生命をつくり、遺伝子操作で形質の異なる生物を可能としています。私は囲碁を嗜んでいますが、囲碁将棋の世界でもソフト開発進歩の速度は驚異的で、10年くらい前であればソフトに負けなかったのですが、昨年購入したものは驚くような強くなっていました。私の力がないせいかPCに数目置かなければ勝負にならないほどです。もっとも最速の囲碁ソフトは(将棋の世界でも同じですが)世界一の天才的棋士でも負けてしまうほどです。PCソフトの普及は将棋新聞の廃刊などというマイナスの影響も出てきますし、囲碁の世界もいずれ同様のことが起こるでしょう。

大学にいた4年前までは行事や授業に追いかけてきた毎日でしたので、退職後の生活は老後をいかに過ごそうかと考えていました。最初は趣味の碁を打とうと碁会所に通ったりしましたが、勝負の世界です。布石から中盤、詰碁まで相手の手を見ながら、地合計算をしながら、次の一手を考え最終的に半目を争う神経の使うゲームです。そのため、終了しても簡単な感懐を話すだけで、対戦相手との会話はほとんどなく何となく物足りませんでした。

そんな中、ある演奏会に出かけたことがきっかけで、上田高校時代に「秋のピエロ」を歌ったことを思い出しました。(高校時代ではコンクールなどでいつも近くの女子高校の合唱に惜敗していたといった思い出もあります)そこから合唱をやってみようと思いつき、2年ほど前か

ら旭川市内の混声合唱団に所属し合唱をやっています。合唱は週1の練習ですが2人の先生に声楽の指導を受けています。70才を超えて合唱をやるなどということは自分には少し無謀な行為でしばらくは楽譜を読むのが精一杯でしたが、それでも少し声も出るようになり上達しつつあると実感しています。

ようやく暖かくなって草花も咲き出しました。このところは女房と庭いじりをしながらの毎日を過ごしています。昨年歌った曲のなかに黒人霊歌の Amazing Grace という大好きな曲があります。これに詩人山ノ木氏が生命の誕生から今日の地球や人類が抱えている問題を歌い上げた壮大な詩を付けてくれましたので紹介します。

写真は歌のレッスンを受けている音楽教室の発表会（昨年12月18日）でのものです。

Amazing Grace 作者不詳 作詞 山ノ木竹志

- 1 海に生まれ 旅をつづけた
緑深き森をぬけ
幾千万の 月日かさねて
我らひと（人類）となりぬ
- 2 ひと（人間）に生まれ 旅をつづけた
果て無き荒野 さまよい
幾千万のいのち ながれて
我らこの地に 在り
- 3 恐れ知らぬ 愚かな旅人
いくさ（戦） 憎しみ なみだ
幾千万の試練 超えて
我ら共に 立つ
- 4 恵み深き 緑の大地
星（惑星）よ 海よ 森よ
幾千万の 命育み
救いたまえ 我ら
幾千万の命 照らして
共に あゆみ たまえ



③道産子、8年目

87期 7組 松本美生（旧姓 竹内）さん（北斗市在住）

縁あって、北海道出身の主人と結婚して来道したのが2009年8月でした。

上田高校卒業後、東京の大学に進学し、そのまま就職、約20年近く東京で生活していた私が北海道は北斗市に居を移すことになるとは、やはり人生は何が起こるかわからない、と他人事

のように思ったりする最近です。

ただ、父は上田高校（その頃は松尾高校だったのでしょうか）卒業後、帯広畜産大学へ進学し、その後はまた上田へ戻ってきたのですが、定年退職間際に札幌に赴任していた時期もあり、北海道とは縁があるのかな、とも思っています。現在、46歳になる私にとって、北海道は遠い遠い土地というイメージは余りありませんでした。親戚も知り合いもない土地で生活していいのかという不安はもちろんありましたが、元来一人が好きな性分なので、どうにもならない程の辛さや寂しさは感じませんでした。考え過ぎない性格だからかもしれません。

こちらに来るにあたって、一番心配したのは、車の運転でした。全くのペーパードライバーだったので、引っ越してきてすぐに教習所でペーパードライバー教習を受けました。その際、教官に何度も言われたのが「ここ道南は道内で一番運転マナーが悪いから気をつけてくださいね。」ということでした。

運転に慣れてきた頃にその言葉を思い出し、自分も道南マナーになっていないか、安全運転を心掛けるよう注意を払っています。

そんな私も道民となって約8年、雪道も運転できるようになり、更に夏休みには、主人と交代しながらですが、知床や宗谷岬など道内を車で巡るまでになりました。

そして、東京時代には全く興味のなかったプロ野球観戦、キャンプ、ワカサギ釣りなど来道してから楽しむようになり、順応性が高いというか、流されやすいというか…

こちらに来て、びっくりしたのは、七夕祭りの「ろうそく1本ちょうだいな♪」の風習でした。まず、スーパーに陳列されていた大量のお菓子に「一体何があるの？」と驚いたことを思い出します。

函館生まれ・育ちの方は、最初ぶっきらぼうな感じがして馴染みにくかったのですが、実はとても面倒見が良く、心根の優しい方が多いです。

何かの際に、お礼を言ったら「なんも、なんも」と

2017年2月初旬 東大沼にて

返され、その言葉の持つ暖かさに心がほっこりしたものです。

ところで、両親が今も上田に住んでいるため、年に1回ほど帰省します。

上田駅の手前、トンネルを過ぎ、四方を山に囲まれた上田盆地とその中央を走る千曲川の流



れが目に飛び込んでくると、帰ってきたことを実感します。

故郷を遠く離れたからか年齢のせいかわ、来し方行く末を等身大で考えられるようになってきました。

北海道新幹線が札幌まで延伸する頃、世界は、日本は、北海道は、上田は、そして私はどうなっているでしょう。

健康第一、ポジティブに、感謝の心を持って、日々過ごしていきたいと思っています。

同窓会本部通信

◆「真田丸」のその後

大河ドラマ「真田丸」が終了し、寒波の襲来で何度となく大雪に見舞われたこともあり、上田の街はいつもの静けさを取り戻しています。上田高校の校門「古城の門」を訪れる観光客が毎日数十人にもなったものがめっきり減り、今は受験真っ最中の3年生が参考書片手に校門をくぐる姿が目につく程度です。

◆ 28年度会員大会

10月8日（土）に会員大会が、384名の参加者を得て開催されました。

最初に防衛省情報本部長 空将の宮川 正氏(76期)による「わが国を取り巻く安全保障環境と自衛隊の活動」と題する講演。引続きアトラクションとして上田高校室内楽班による演奏が行われました、中でも「真田丸のメインテーマ」の演奏が拍手喝采でした。理事長・来賓挨拶などの後、お待ちかねの懇親パーティーが盛大に行われ、最後に全員で凱歌斉唱をしました。



◆「うさぎ追いし ～山極勝三郎物語」の放映

上田の偉人のひとり、上田高校の前身の第一番小学校松平学校・上田変則中学校を卒業、東京帝国大学を卒業し、その後、世界で初めて人口癌実験を成功させ、癌の発生原因の究明に道を開いた医学者である山極勝三郎。その人の半生を描いた映画が全国で放映されました。この映画のプロデューサーは62期の永井正夫氏。そして映画は上田各地でロケがなされ、上田市民が多数エキストラとして出演しました。また、同窓生から上田高校に対し、1200人分の鑑賞券がプレゼントされ生徒・教職員の殆どが観賞しました。



◆ 校史編纂

校史は90周年記念事業の一つとして企画され、昭和49年3月までを対象とした「校史 高校第一編」が最後となっており、既に40数年が経っていることから高校第二編の編纂が急務となっていました。そこで26代校長の小山壽一氏を委員長に編纂委員会を組織し、120周年記念事業として編纂することとなりました。校史は草創編、中学前編、中学後編、高校第一編の各巻が発行され、本部事務局で販売していますので、ご希望の方はお申し込みください。

◆ 上田高校2年生の研修旅行

昨年11月30日～12月4日、2年生は研修旅行で台湾を訪れました。今までの研修旅行は沖縄など国内がほとんどでしたが、SGHの一環として台湾の高校生と交流し、グローバルな視野を養うことを目的として行先が台湾となりました。台湾の自然や食文化に触れる見学・実習を行うフィールドワークも行われるなど中身の濃い研修旅行となりました。

◆ 山浦善樹氏の講演会

2月24日（金）に、1・2年生対象の社会講座の一環として、「卒業生による進路講演会」が開催されます。講師は昨年まで最高裁判事をされていた63期の山浦善樹氏です。山浦氏は東京神田の事務所で庶民のもめ事を解決してきた「マチベン」でしたが、一転して最高裁判事に就任されました。弁護士会の要職の経験もなく、著名な事件を担当したこともないマチベンの起用は異例の人事でした。司法研修所教官や法科大学院教授など幅広い分野での活躍が評価されたのです。山浦氏の講演は1・2年生にとって進路の選択や学習の心構えなど大きな啓発の機会になるものです。

◆ 上田高校卒業式

3月1日上田高校の卒業式が行われます。今年は全日制318名、定時制17名の計335名が卒業していきます。浪人する者もありますが、大半が新しい学び舎を求めて巣立っていきます。各地の同窓会・支部で暖かく迎えてほしいと思っています。

編集後記

3月、4月は別れと出会いの季節ですね。特に学校(大学)に勤めているとそのことを強く感じます。卒業式で学生を送り出し、入学式で迎える。迎える学生の年齢はいつも一定ですが、教員は一年ごとに年を取ります。そのうち、入学した学生と一緒に卒業するのも近いのではと思います。会報の第4号をここに無事に完成することができました。今回は誌上講演などもあり内容がより深いものになっています。寄稿された方々に感謝いたします(73期 北澤多喜雄)。